

意見番号	委員	ページ	行数	文章	意見等	回答
1	伊藤	6	162	図4	図2.4	修正しました
2	伊藤	6	167	図6	図2.6	修正しました
3	伊藤	7	188	図7	図2.7	修正しました
4	伊藤	8	248	図14	図2.14	修正しました
5	加納	1	9	6月の	6月に(?)	修正しました
6	加納	4	96	発生履歴と整合的する場合のみ	発生履歴と整合する場合のみ(「的」トル)	修正しました
7	加納	14	370	断層のずれ量に相当するデータ	374行目では「ずれ量(すべり量)」	「断層のずれ量(すべり量)に相当するデータ」とし、以降すべり量に統一しました
8	加納	14	371	時間予測モデル(Shimazaki and Nakata, 1980)で算出した	時間予測モデル(Shimazaki and Nakata, 1980)を適用して、最新の活動(地震発生)時のずれの量と長期的な断層のずれ速度とから算出した	修正しました
9	加納	14	390	すべり量u	u	修正しました
10	加納	14	391	「南海トラフの地震の長期評価」(地震調査委員会, 2001b)では、すべり量に代わり、南海地震時における室津港の隆起量データが用いられている。	「南海トラフの地震の長期評価」(地震調査委員会, 2001b)では、すべり量に代わる量として、地震時隆起量すなわち室津港の潮位観測Shimazaki & Nakata (1980)による室津港(高知県室戸市)の隆起量、震源断層の長さ、地殻変動・津波データに基づく震源モデルから推定した地震時すべり量、津波週上高、および津波データに基づく震源モデルから推定した地震時すべり量が検討された。これらについて、宝永南海地震と安政南海地震についてのそれぞれの推定量と、ふたつの地震の間隔を用いて、安政南海地震と昭和南海地震の間隔を推定し、これが実際の昭和南海地震が発生した1946年の±30年に入った地震時隆起量、震源断層長、および地殻変動・津波データに基づく震源モデルから推定した地震時すべり量を用いた。また、第二版では、室津港の隆起量データだけが用いられている。(第一版では室津港の隆起量以外の代理指標も検討された、ということを説明してほしいという趣旨です。冗長なら、「…など」としていただいてもいいと思います)	「南海地震時における室津港の隆起量など」に修正しました。手法の報告書であることを鑑み、第一版の詳細説明は省略させていただきました。
11	加納	14	392	一点の	「一点の」はu軸上的一点(单一の数字)という意味でしょうか? あるいは、室津港だけ、という空間的な一点の意味でしょうか?	「单一の」に修正しました
12	汐見	1	12	この公表から	「この」が指すものが、平成13年報告書か長期評価かが必ずしも明確ではない。具体的に「平成13年報告書の公表」と書いてはどうか?	修正しました
13	汐見	1	14	手法が導入・活用されてきた	この追補版も長期評価も地震本部(地震調査委員会)が行っているので、能動態で書いてはどうか?「手法の導入及び活用を進めてきた」など	修正しました
14	汐見	1	15	近年の評価で標準的に用いられるようになった主要な手法	各手法とも採用は1~2例に止まっており、「標準的」「主要」と言えるかは疑問。単純に、「近年の評価で採用した手法」くらいでどうか?	修正しました
15	汐見	1	17-19	本書では、~解説する。	「モンテカルロ法」=「不確実性を評価に取り入れるための計算手法」は誤解を与える記述である。P.3 L.52~を参考に再構築されてはどうか?	修正しました
16	汐見	3	43-44など	統計モデルを用いて体系化されている。	地震調査委員会の報告書に関する表現は能動態で書くことを基本としてはどうか?(以下の該当箇所は言及しない)また、過去の報告書引用時の時制がバラバラ。過去の解析方法や評価結果の引用あるいは参考の場合は、過去形に統一してはどうか(本件も、以下の該当箇所について個別の言及はない)。	修正しました
17	汐見	3	44	この報告書	「この」が指すものが直前の平成13年報告書か、「この」追補版かが不明瞭。具体的に「平成13年報告書では」と明記してはどうか?	修正しました
18	汐見	3	54-55	発生履歴が持つ不確実性を評価するため	「~不確実性を長期評価に“加味”するため」の方がより正確ではないか?	修正しました
19	汐見	3	61	新たな物理モデル	60-63行の文章に「モデル」が6回も使われている。「新たな物理モデル」という記述の必要性は無いと考えるが、どうか?	「新たな物理モデル」を削除しました
20	汐見	3	64	本報告書では	今回の報告書を指す場合は「本追補」に統一された方が良い。	修正しました
21	汐見	4	78-79	その信頼性	「その」は何を指すのかが不明瞭。地形・地質記録? 評価結果?	「評価結果の信頼性」に修正しました
22	汐見	4	82-84	相模トラフ沿いの地震活動の長期評価(第二版)~における具体的な適用事例	図表等では、(地震調査委員会, 2014)などではなく「相模トラフ(の)長期評価」として引用されているので、「平成13年報告書」同様、ここで、各長期評価は「相模トラフ(の)長期評価」などの名称を与えてはどうか? なお、図表キャプションで「の」が含まれるものと含まれないものがあるので、統一されたい。	修正しました
23	汐見	5	113-114	図2.1だと、乱数を発生させて生成した~外し、	報告書としては少し口語的すぎる文章である。修正を検討頂きたい。	修正しました
24	汐見	5	123	図2.2の右から	図2.2 b) の右から	修正しました
25	汐見	5	133-134	上に述べた手法	本節冒頭で述べた手法を指すと推察可能だが、「上に述べた」だと(i)の従来法も含まれるため、誤解を生じる可能性がある。表現や構成を検討して頂きたい。	解説したい手法の中にさらに(i)(ii)と手法が入れ子になっているとわかりづらいため、従来法の解説は省略して比較のための参考扱いとしました。
26	汐見	5	139-140	ピンク色でハッチをつけた~示す。	文章の係り受けがややこしく、意味が取れない。修正を検討して頂きたい。	修正しました
27	汐見	6	143-144	(1923年大正地震、1703年元禄地震、1293年永仁地震、歴史記録(3地震)と呼ぶ)	(1923年大正地震、1703年元禄地震、1293年永仁地震。以下、歴史記録(3地震)と呼ぶ)として、3つの地震の言い換えを定義していることを明確にすること。	手法の説明をモンテカルロに一本化したため、特別に定義する必要がなくなりました
28	汐見	6	147	両者	「両者」だと指すものは2つだが、ここではモンテカルロと(i)で求めた値、歴史記録(3地震)が使われている。これらの2つを選択しているなら、文章として不明瞭。3つなら、「両者」の使用は不適当である。	修正しました
29	汐見	6	148など	「今後30年間の地震の発生確率」など	「今後」は現在が基準で、現在よりも後を表す言葉。過去の評価を引用するので、「評価時点から30年間の~」などとしてはどうか?(他にも同様の記述多数。以下の該当箇所は言及しない)	修正しました
30	汐見	6	148	この後	他の個所にあわせると、「以下」ではないか。	修正しました
31	汐見	6	154	大きな値となっているためと思われる。	断定していないが、他にどのような理由が考えられているのか?	30年確率の推移に関する記述は手法の報告書の本題ではないので削除しました
32	汐見	6	154-155	モンテカルロ法を用いることで、~きちんと考慮することが可能となる	あくまでも「モンテカルロ法」は乱数を使った近似解である。「きちんと」は言い過ぎではないか?	上記に同じ
33	汐見	6	156	1495年明応地震を加えたものである。	なぜ明応地震を参考扱いにしたのか、理由に触れて良いか?	上記に同じ。また長期評価本編では4地震の確率推移について何も言及されていません
34	汐見	6	159	ある時点(2014年1月1日時点)	ある時点とアバウトな書き方に括弧書きで具体的な年月日が添えられているのは変ではないか。この文章は一般論なので、具体的な日付は不要と考える。	修正しました
35	汐見	6	162	図4	図2.4。他にも図表番号の修正漏れが散見されるが、以下の該当箇所には個別に言及しない	修正しました
36	汐見	6	169	図2.5	図2.6のtypo?	修正しました
37	汐見	7	188	図7で③時系列の一番古い地震	意味が取れない、「図2.7の時系列③の一番古い地震」ということか?	修正しました
38	汐見	7	195-198	千島海溝で発生する~評価を行う。表3.2に示すように、~評価を行った。	連續する文章で同じ述語が(異なる時制で)繰り返されており、読みにくいので修正を検討頂きたい。なお、表番号が間違っている。	修正しました
39	汐見	7	199	その分布の±1σの幅になるべく合うような正規分布を仮定	意味が取れない。図2.8からは、塗色範囲が“1 sigma”と書かれているように読めるが、±1σで合っているか?	修正しました
40	汐見	7	209-210	最頻値は~となった。	文頭の「最頻値は」の係り先はμとσと思われるが、遠く離れており読み取りにくい。修正を検討頂きたい。	修正しました

41	汐見	8-9	249-251/256-257	評価を行った時点では～非常に低いことがわかる。 現在は2011年の最新活動時期から～低い時期であることが分かる。	同じ意味の文章が繰り返されている。249行目の経過年数8年は256行目の発生間隔の情報も重要である。これらの段落を統合し、東北地方太平洋沖地震型の発せ可能性が低いことを最後にまとめて書くのでどうか？	過去の評価時点において東北地方太平洋沖地震の発生可能性が低かったことを手法の報告書で強調する必要はないと判断し、該当の記述を削除しました
42	汐見	14	370	「長期的な地震発生確率の評価手法について」(地震調査委員会, 2001a)では	平成13年報告書では、	修正しました
43	汐見	17	459	本稿	今回の報告書を指す場合は「本追補」に統一された方が良い。	修正しました
44	汐見	20	表2.2		藻叢布沼の表にMP8のデータが転載されていない	修正しました
45	汐見	22	図2.4		図中に「評価時点」と記載されているが、その具体的な日付が図面及びキャプションからは分からず。	図2.4は削除
46	汐見	24	588	推定され津波履歴	推定され“た”津波履歴	修正しました
47	汐見	24	594	ばらつき示す α	ばらつき”を”示す α	修正しました
48	汐見	25	図2.11		キャプションが下の図2.12の脇にまで伸びている。レイアウトを再検討頂きたい。	修正しました
49	汐見	25	図2.12キャプション	図4-18	図2.9	修正しました
50	汐見	25	図2.12キャプション	水色の破線がイベントが	水色の破線”は”イベントが	修正しました
51	藤江	4	L93, L98	(あ)相模トラフ沿いのM8クラスの地震の評価手法(パラメータをサンプリングする手法)	名前はカッコ内の方が適当ではないか→(あ)パラメータをサンプリングする手法	修正しました
52	藤江	5	L119, L120	示す	どこに何が示されているのか読み取れない	修正しました
53	藤江	5	L139	bin	定義が明示されていない。図2.13の説明と同じにした方がいいのではないか	binの定義が不明なため、個数の多い側から積算して、としました
54	藤江	6	L147	両者	赤と緑のこと？それとも赤と緑がピンクの領域と矛盾がないということ？	これらに修正しました
55	藤江	6	L152	(i)の手法(青実線)に比べて本手法(赤の実線と破線)は30年確率の上昇が緩やかである	最初のころばらつきが大きい方が急で、次第にばらつきが大きい方が緩やかになる (ばらつきが大きい方が長期間に分散する)ので、この表現はあまり正しくないのではないか	手法の報告書の本題ではないので、該当の段落ごと削除しました
56	藤江	21		図2. 1	もう少し整理した方がよい。左端に記載のある矢印が下端のパラメータ値や○×にもかかっているのが分かりにくい。図の上にケース番号とパラメータを記載するほうがよい。また、ケース②も μ 、 α もあるので、 μ 等の添え字はケースの番号と一致させる必要があるのではないか？	ケース②については、(採用しないので) μ 等の添え字を付けない予定です。 図の見やすさについては検討したいと思います。
57	林	4-9	71-257	2章全体	BPT分布とモンテカルロ法を組み合わせることは評価「手法」、この評価手法はパラメータをサンプリングする「手法」と、発生履歴をサンプリングする「手法」の二つの手法で構成される、パラメータをサンプリングする「手法」には、相模トラフ沿いなどの地震の長期評価で、BPT分布とモンテカルロ法を組み合わせた「適用事例」がある、発生履歴をサンプリングする「手法」には、千島海溝で発生する超巨大地震などの地震の長期評価に「適用」された「事例」がある、具体的な評価の「手順」は適用事例毎に異なる、と位置付けて、「手法」・「適用」・「事例」・「手順」を使い分ける	修正しました
58	林	4	93	(あ)相模トラフ沿いのM8クラスの地震の評価手法(パラメータをサンプリングする手法)	(あ)パラメータをサンプリングする手法(相模トラフ沿いのM8クラスの地震の評価に適用された手法)	修正しました
59	林	4	93	(い)千島海溝で発生する超巨大地震(17世紀型)と東北地方太平洋沖地震型の評価手法(発生履歴をサンプリングする手法)	(い)発生履歴をサンプリングする手法(千島海溝で発生する超巨大地震(17世紀型)と東北地方太平洋沖地震型の評価に適用された手法)	修正しました
60	林	5	109	(2)相模トラフ沿いで発生するM8クラスの地震の評価手法	(2)パラメータをサンプリングする手法—相模トラフ沿いで発生するM8クラスの地震の評価への適用事例	修正しました
61	林	6	159	ある時点(2014年1月1日時点)	ある時点	修正しました
62	林	6	175	(3)千島海溝で発生する超巨大地震(17世紀型)と東北地方太平洋沖地震型の評価手法	(3)発生履歴をサンプリングする手法—千島海溝で発生する超巨大地震(17世紀型)と東北地方太平洋沖地震型の評価への適用事例	修正しました
63	林	6	176	14C	炭素の放射性同位体14C	修正しました
64	林	7	183	以下のような地震発生年代の確率分布関数を考慮できるような手法を用いて評価を行った	以下のように地震発生年代の確率分布関数を考慮して、発生履歴をサンプリングする手法を適用して評価を行った	修正しました
65	林	7	194	1)千島海溝で発生する超巨大地震(17世紀型)の評価手法	1)千島海溝で発生する超巨大地震(17世紀型)の評価への適用事例	修正しました
66	林	7	201	(3)千島海溝で発生する超巨大地震(17世紀型)と東北地方太平洋沖地震型の評価手法	(3)発生履歴をサンプリングする手法—千島海溝で発生する超巨大地震(17世紀型)と東北地方太平洋沖地震型の評価への適用事例	修正しました
67	林	7	201	図2.7で示した手法	図2.7で示した手順	修正しました
68	林	7	211	従来言っていた値(約500年、いわゆる500年間隔地震)	従来言っていた値(約500年)	修正しました
69	林	8	230	2)東北地方太平洋沖地震型	2)東北地方太平洋沖地震型の評価への適用事例	修正しました
70	林	11	320	(ii)のアプローチ	(ii)のアプローチ	修正しました
71	林	17	464	その間に地震学、統計科学、計算技術が遂げた著しい進歩	この進歩には地震本部が地震調査研究を推進してきたものが含まれるのに、そのことに触れなくてよい。	修正しました
72	吉田	3	48	期待経過時間をBPTモデルの平均発生間隔として用いる	「期待経過時間を平均発生間隔とするBPTモデルを用いる」のほうが繋がりが良いのでは	修正しました
73	吉田	4	96~97	それが観測された発生履歴と整合的の場合のみ	「それが観測された発生履歴と整合する場合のみ」と「的」を削除	修正しました
74	吉田	4	105	主に個別の断層における発生履歴	「断層」よりは「地震」としたほうが良いのでは	平成13年報告書では、個々の断層に着目した確率評価となっておりますので、それを踏襲しました
75	吉田	5	114	外れる地震が存在するので外し	2番目の「外し」を「除外」としてはどうか(同じ語句の重複を避ける)	修正しました
76	吉田	5	138	図2.3は	「図2.3は」→「図2.3は」	修正しました
77	吉田	5	139	(μ と α)	3章以下に合わせて(μ , α)としてはどうか(以下幾つが同様の表現がある。あと数式を使って記述)	修正しました
78	吉田	6	143	1293年永仁地震、歴史記録(3地震)と呼ぶ	「1293年永仁地震、この後、歴史記録(3地震)と呼ぶ」と「この後」を入れてはどうか	修正しました
79	吉田	6	162	図4でみたように	「図2.4でみたように」と修正	修正しました
80	吉田	7	178	較正年代の確率分布関数を出力できるようになっている	「較正年代の確率分布関数を出力できる」で止めては「ようになっている」を削除	修正しました
81	吉田	8	249	評価を行った時点では	初出では「評価を行った時点(2019年1月1日)では」と年月日を明記してはどうか	修正しました
82	吉田	9	255	頻度が大きくなっていることによる	「頻度が大きくなっている」と「ことによる」は削除しても良いのでは	修正しました
83	吉田	12	356~357	仮定することが可能である	「仮定することが可能な場合である」のほうが「例えは」を受けての文章として自然では	修正しました
84	吉田			図のキャプションに「(相模トラフ長期評価、図6)」など過去の評価の図番号が入っている	これは私が過去の評価との対応関係がわかりやすいように入れたものだが、報告書として出す時には、削除しても良いのでは	加筆修正したものもあるため、対応関係として残しました